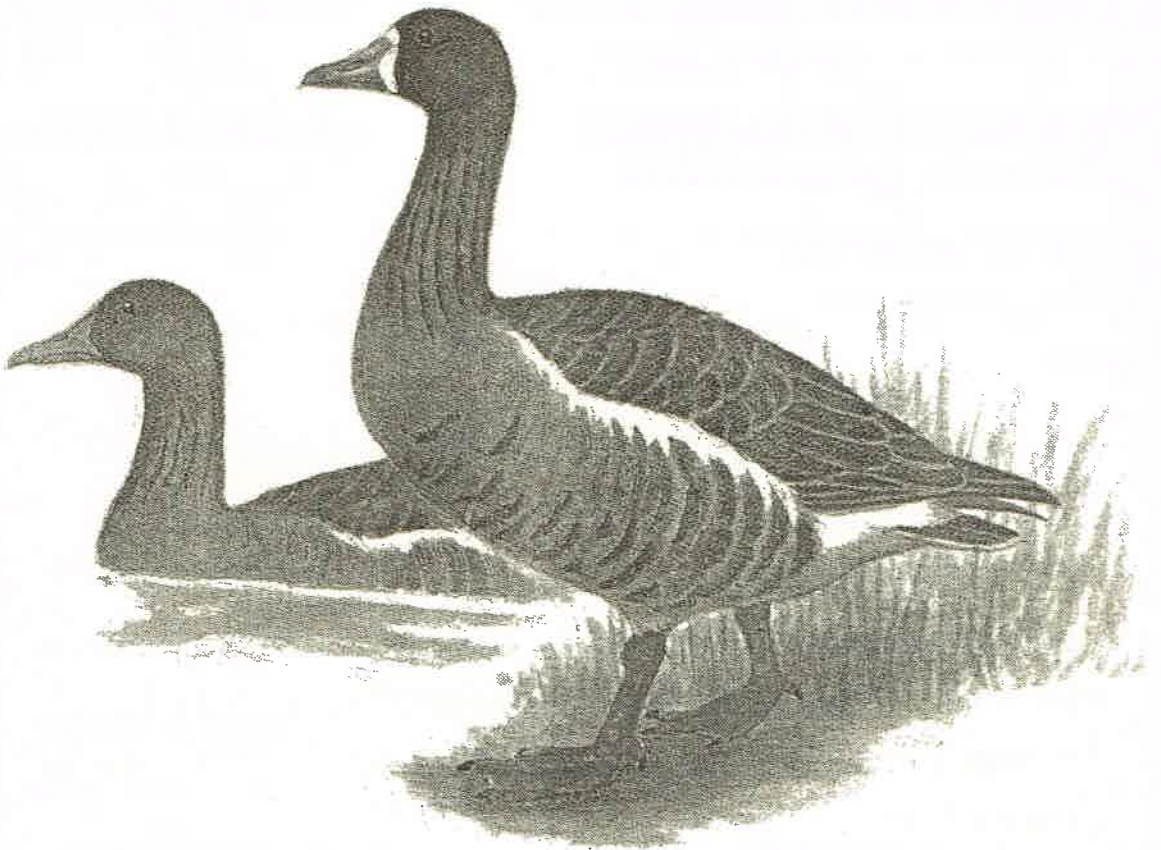


エゾマツ



マガン *Anser albifrons*

No.56 2001. 3. 30

北海道ボランティア・レンジャー協議会

マガン (表紙絵について)

美唄の宮島沼は面積約30㌦の沼です。4月になると、この沼に3万羽とも言われるマガンが集結する国内最終、最大の中継地です。言ってみれば、シベリアに向かうマガンの国際空港です。毎年必ずゴールデンウィークに風を掴んで旅立ちます。

ここから先のルートはまだはっきりと調査されていないと言います。北海道の水田ロードの石狩川、天塩川ぞいに一気に北上するのでしょうか。とすればこの先はサハリンでしょうか。

マガンの道は、カムチャッカ・ルートとサハリン・ルートがあり、最終目的地は東シベリアの北極圏とも言われていますが、習性や生態は謎の部分が多い鳥です。

目次

1. 巻頭言 「ボランティア国際年」を迎えて……………会長 川端 功治 (1)
2. 活動報告と定期総会のご案内…………… (3)
3. 会員の声…………… (4)
4. 各部この一年…………… (6)
5. 日本の絶滅のおそれのある維管束植物……………小泉 三雄 (7)
6. 目玉でイワナを釣る?…クワンナイ川の沢のぼり……………三崎 篤 (13)
7. 本の紹介…………… (16)
8. 横目で見る北イタリア美術館巡り……………佐藤 健一 (18)
9. ニュージーランド自然観察の旅……………伊藤 秀平 (22)
10. キーワード…………… (26)
11. 平成13年度 自然観察会予定表 (案) …… (27)
12. 編集後記…………… (28)

「ボランティア国際年」を迎えて

会長 川端功治

1997年の国連総会で日本が提案して、2001年をボランティア国際年とすることが決まったことは、先刻来周知の筈でしたが、何時の間にか記憶がおぼろになって、今年が該当の国際年であると指摘されて狼狽するようでは、提案国の国民の一人として誠に面目がありません。

既に各団体はそれぞれの持ち分に応じて活動を開始しておりますが、主流となるのは全国社会福祉協議会などが運営委員となって、目ざましい行動を展開するものと思われ大いに期待されているところであります。

ところが我が協議会は、当然のことながら自然と人間の架け橋に徹すること以外に何の術いや奇策を弄する考えもありません。誰が見ても誠心誠意善意の塊りとみられるような行動に終始したいと念じております。

それでも来し方一年を振り返ってみて、ああすれば良かった、こうすればよりベターであったと反省させられることが多々あるものです。その絶好の機会である総会が目前に来ました。

全役員の皆様方に大変ご苦勞をお掛けしました。その成果を披瀝して批判や指導を受けたいと考えております。その中で次年度以降に持ち越しになった事案について概略触れておきたいと思っております。

内外の好評を受けた野外観察ハンドブックは在庫零となり、現地の植生や施設の変動があるので改訂版の必要性を痛感しておりますが、何々周年記念事業として発行すると、その年度の在籍者に負担が集中してしまうので、長年少しずつ積み立てる方式で進めて参りましたが、カラーの図版をもっと採用すべき等、値の張る意見もあって、期待が膨らみますので、なかなか前途遼遠の感じがいたします。

その内に改訂版の原本作りにかからなければならぬと思いますので、我こそはと思う方のアシストを求めますので、その節は宜しくご協力の程をお願い致します。

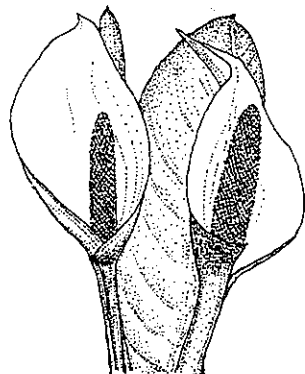
それから念願の地方支部の発足と観察活動の活発化であります。期待する程の成果を上げるまでに至りませんでした。それには多くの原因があります。

これは始めから予想されたことですが、地方はいまだに緑が一杯で、小鳥が囀りどこかしこも、野生生物でみちています。住民の皆さん方に緑への渴望感が希薄です。したがって今更改まって自然観察などはテレクサイしぐさと言えましょう。けれどもここが大事なポイントなのです。開拓開発と文明文化が進んだ都市も、かつては長閑な田園風景であった筈です。

ダイオキシン、二酸化炭素に苦しむ都市砂漠にしてはならない。今が大事の分れ道と自覚するなら、自然に親しみ、野生生物との共存共栄の道を探る絶好のタイミングと考えては如何でしょうか。

町内会の散歩会、ハイキングクラブ、歩け歩けの会から自然観察会に誘導するのも一つの方法でしょう。蝶好き、虫好き、花好きの混成グループが出来れば素晴らしい指導者陣となります。ボランティア国際年を記念して、とにかく何かをやってみては如何でしょうか。

総会では新年度の事業が検討される事になっていますが、折角の機会ですから各位の忌憚の無い意見の交換を行い、明日に向け晴れがましいボランティア国際年のスタートを切りたいと思います。



平成12年度 1月以降の活動

- 1月18日 (木) 1月の森の観察会 (10:00~12:00)
開拓記念館前集合 公園事務所への協力
- 1月20日 (土) 第3回役員会 (18:30~) 於:環境サポートセンター
- 2月25日 (日) 冬の森の観察会 (10:00~14:30)
野幌森林公園大沢口集合 公園事務所への協力
- 3月23日 (金) 第4回役員会 (18:30~) 於:環境サポートセンター
- 3月25日 (日) 野幌の冬の森観察会 (10:00~12:00)
開拓記念館前集合



平成13年度 第16回定期総会のご案内

事務局より各会員の皆様にご案内がされていますが、下記の通り、平成13年度の定期総会が開催されます。本会の発展のため、是非ご参加ください。

日時 平成13年4月7日 (土) 13:00~より受付

場所 かてる2・7 710号会議室 (札幌市中央区北2条西7丁目)

日程 • 13:40~14:40 研修会

講師 北海道環境生活部環境室自然環境課

課長補佐 但野 五之 氏

• 15:00~17:00 定期総会

• 17:30~19:30 懇親会

会場 ユック (札幌市中央区北1条西5丁目興銀ビル地下1F)

会員の声

北広島市 佐藤 清一

今年こそは行事に参加しようと思いつつも、名前だけの会員で2年間も過ぎました。年間多くの自然観察会を行って着実な成果をあげていることを「エゾマツ」などを読んで感じていました。今後とも、そうした自然観察会を通して、市民のなかに自然の理解や保護が深まっていくことを念じています。

ここで日頃考えている一つのことを提起させてもらいます。これからは、いくつかの団体などとも協力して、混合林をめざした植樹、里づくり、ビオトープ、河川などの自然復元などにも取り組んでみたいと思っています。

いろいろと困難なことも多いでしょうが、自然の保護とともに破壊された自然の回復・復元をしていくことが課題となっていると思われます。

今年から行事に参加します。よろしくお願いします。

北海道産の米を食べよう

新冠町 杉田 清

先日、ある講演会で聞いた話で同感と思ったことがあるので書いてみました。というのは、北海道の米がおいしいので、道産米を食べようと言うことでした。

私も友人が米を作っているので、その友人から毎月精米してもらって米を食べています。いつもおいしと思って食べていたのです。内地米に負けない味です。私たち北海道人はやっぱり道産米を食べたいものです。

札幌市厚別区 小山元子

孫には、これからも、地球は宇宙で一番美しいお星様なのよ、ってずっと言っていたいのです。

帯広市 小野寺 実

十勝平野は段丘が連なり、豊富な覆流水が走って湧水となり、豊かな自然を育てている。ボラレンの仲間も地域ごとにこの自然の観察指導に頑張っている。

然し今高規格道路など大規模な道路建設で、湧水の地層が分断し、急速に自然が失われている。帯広でも、都市の中にある「若葉の森」のエゾサンショウオの棲む湿原性の貴重な自然が「弥生道路」の建設で、これらの生物の将来が心配されている。貴重な自然があってこそボラレンの活動が可能で、今仲間と心痛めているのが現状だ。

札幌市清田区 祐川 弘

ボラレンを手前勝手な理由で不登会員を決め込みご迷惑を掛けています。エゾマツ等を拝見して、年々高度な研修成果とご活躍が忍ばれ敬意を表します。

時折近所の山野に出てみると興味が増し疑問多発ですが、一人では解決せず、仲間の大切さを味わっています。雑務を制覇、再び仲間へ飛び込みたく考えますが、長欠から敷居が高く飛び込み勇気の養成中です。

会員の方々、私の二の舞えを踏まず、少々の障害は越えて参画し会の発展にご尽力願います。



研修部この一年

研修部 部長 小林 英世

3月25日(日)の「野幌の冬の森」観察会をもって、平成12年度の観察の一切が無事終了しました。12年度の成果や反省を整理して、13年度につなげていきたいと研修部は考えています。

12年度、研修部では、会員の皆さんに少しでも役立ててもらおうと、研修資料を広報部の協力で「えぞまつ」と一緒に送付させていただきました。今後も続けていきたいと思ひます。

13年度の観察会を構想するとき、会員の皆さんに、ぜひ協力を仰ぎたいことがあります。それは、観察会の下見と本番への参加のお願いです。下見は会員の研修と位置付けていますので、自分の知識を得る場と考え、ぜひ参加してほしいものです。そのことが、会員相互の交流や親睦を深めることになると思ひます。

広報部活動をふり返る

広報部 部長 稲葉 孝徳

平成12年度は広報誌を53号から56号まで発行しました。毎号予定通り発行できたことにホツトしています。これも、原稿依頼に快く応じてくれた、会員の方々に心よりお礼申し上げます。しかし、編集、発送作業が順調に進んだわけではありません。

原稿が集まらず、作業が遅々として進まぬこともありました。そこで、会員の皆様に改めてお願い致します。どうか、気軽に投稿をしていただきたいのです。

言うまでもなく、広報誌は、会員の皆様の交流の場であり、紙面を通じた親睦の場でもあります。全道の会員が一同に会することは不可能ですが、紙面を通じ、情報交換することは可能です。広報誌「エゾマツ」が会員の皆様の親睦と交流の場になるよう平成13年度も努力していきたいと思ひています。

日本の絶滅のおそれのある維管束植物

札幌市東区 小泉 三雄

絶滅の恐れのある維管束植物（種子植物、シダ植物）の分布状況をまとめた環境庁のレッドデータブックが2000年（平成12年）8月23日完成した。

早速、環境庁自然保護課野性生物課へ北海道関係分をコピーしてほしい旨文書でお願いした。数日後環境庁から電話あり、財団法人自然環境研究センターで販売されている、ちよっと値段高いがと～遠慮がちな言葉で知らせてくれた電話の向こうに、開かれた環境庁の姿を感じた。

1997年公表のレッドリストより絶滅危惧種は265増え1665種となり、日本産の野性維管束植物約7千種のうち、絶滅危惧種は約24%になった。

新たに絶滅危惧種とされたのはエゾキンボウゲ（道に育成）、キタダケトラノオ（長野の育成）など。キキョウなどやく千四百種が絶滅危惧種とされたレッドリスト作成時は、情報不足のため危険度の評価ができなかった。

レッドデータブックには、レッドリスト作成のため94～95年に全国を14キロ四方の区画に分け調査したデータも記載、A4判660ページの膨大なもの。

それまで10年間に、維管束植物の個体数が減少した区画が全体の50%に及び、個体が百未満しかない区画も69%という状況が明らかになった。減少の原因は、道路工事や土地造成など、開発が最も多く36%、園芸用の採取が24%、自然推移が15%など自然推移には地球温暖化の影響も考えられるという。

北海道の分布状況のみを抜粋しましたので参考にしてください。ブックには現地調査の集計結果、形態と生育環境、生育地の現状と判定理由などが記載されております。

絶滅 (EX)

我が国ではすでに絶滅したと考えられる種。

1、タカネハナワラビ（ハナヤスリ科）
有珠山に自生していたが、1977年の噴火で自生地が消失した。

絶滅危惧 I A類 (CR)

ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種。

1、ミヤマハナワラビ（ハナヤスリ科）

- 2、イブリハナワラビ（ハナヤスリ科）
- 3、ヒメデンダ（メシダ科）
- 4、アポイカンバ（カバノキ科）
- 5、カラフトノダイオウ（タデ科）
- 6、ミツモリミミナグサ（ナデシコ科）
- 7、チシマツメクサ
- 8、エゾマンテマ
- 9、カムイビランジ
- 10、チシママンテマ
- 11、スガワラビランジ
- 12、カンチャチハコベ

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 13、オオイワツメクサ (ナデシコ科) | 49、エゾノクサタチバナ (ガガイモ科) |
| 14、ダイセツトリカブト (キンポウゲ科) | 50、クシロネナシカズラ (ヒルガオ科) |
| 15、キリギシソウ | 51、エゾルリムラサキ (ムラサキ科) |
| 16、オオワクノテ | 52、エゾルリソウ |
| 17、エゾキンポウゲ | 53、エゾニガクサ (シソ科) |
| 18、カラクサキンポウゲ | 54、キタミソウ (ゴマノハグサ科) |
| 19、ダイセツヒナオトギリ (朴科) | 55、ベニシオガマ |
| 20、エゾオオケマン (ケシ科) | 56、ヒロハガマズミ (スイカズラ科) |
| 21、ミヤウチソウ (アブラナ科) | 57、ユウバリシャジン (キキョウ科) |
| 22、シリベシナズナ | 58、ホソバエゾノコギリ (キク科) |
| 23、ソウウンナズナ | 59、エゾノチチコグサ |
| 24、ハマタイセイ | 60、ヤナギタウコギ |
| 25、タカネグンバイ | 61、ハタマタタンポポ |
| 26、キヨシソウ (ユキノシタ科) | 62、ミヤマノギク |
| 27、エゾツクモマグサ | 63、オオヒラウスユキソウ |
| 28、ユウバリクモマグサ | 64、フタナミソウ |
| 29、クロミサンザシ (バラ科) | 65、タカネタンポポ |
| 30、エゾサンザシ | 66、カラフトグワイ (オマダカ科) |
| 31、メアカンキンバイ | 67、イヌイトモ (ヒルムシロ科) |
| 32、エゾノトウウチソウ | 68、ツツイトモ |
| 33、エゾモメンズル (マメ科) | 69、イトイバラモ (イバラモ科) |
| 34、トカチオオギ | 70、シラオイエンレイソウ (ユリ科) |
| 35、カリバオオギ | 71、エゾイトイ (イグサ科) |
| 36、レブンソウ | 72、ホロムイコウガイ |
| 37、リシリゲンゲ | 73、エゾイヌノヒゲ (ホシクサ科) |
| 38、タニマスミレ (スミレ科) | 74、ユウバリカニツリ (イネ科) |
| 39、シソバキスミレ | 75、タカネエゾムギ |
| 40、エダウチアカバナ (アカバナ科) | 76、ヤマオオウシノケグサ |
| 41、レブンサイコ (セリ科) | 77、ホソバドジョウツナギ |
| 42、イチゲイチヤクソウ (仔刈科) | 78、クリイロスゲ (カヤツリグサ科) |
| 43、エゾイチヤクソウ | 79、ホリスゲ |
| 44、ヒダカミチバツツジ (ツツジ科) | 80、カンスゲ |
| 45、トチナイソウ (サクラソウ科) | 81、ヤリスゲ |
| 46、カムイコザクラ | 82、クグスゲ |
| 47、ユウバリコザクラ | 83、ヌマスゲ |
| 48、リシリリンドウ (リンドウ科) | 84、カラフトイワスゲ |

- 85、ヒメウシオスゲ (イネ科)
- 86、チシママツバイ
- 87、クゲヌマラン (ラン科)
- 88、カラフトアツモリソウ
- 89、キバナノアツモリソウ
- 90、ヒメミズトンボ
- 91、クシロチドリ

絶滅危惧 I B 類 (EN)

I A 類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種。

- 1、チシマヒカゲノカズラ (ヒガシカズラ科)
- 2、スギラン
- 3、ヤチスギナ (トクサ科)
- 4、ヒメドクサ
- 5、イワカゲワラビ (オシダ科)
- 6、オオエゾデンダ (ウラボシ科)
- 7、リシリビャクシン (ヒノキ科)
- 8、エゾマメヤナギ (ヤナギ科)
- 9、エゾノタカネヤナギ
- 10、ヒメイワタデ (タデ科)
- 11、エンピセンノウ (ナデシコ科)
- 12、エゾタカネツメクサ
- 13、カラフトマンテマ
- 14、エゾハコベ
- 15、エゾイワツメクサ
- 16、アッケシソウ (アカザ科)
- 17、ヒダカソウ (キンポウゲ科)
- 18、ツクモグサ
- 19、シコタンキンポウゲ
- 20、イトキンポウゲ
- 21、チトセバイカモ
- 22、ナガバカラマツ
- 23、ベニバナヤマシャクヤク (萩科)
- 24、ツルクケマン (ケシ科)
- 25、トモシリソウ (アブラナ科)
- 26、ナンブイヌナズナ
- 27、モイワナズナ
- 28、モミジバショウマ (ユキノシタ科)
- 29、エゾネコノメソウ
- 30、マルバチャルメルソウ
- 31、クロミノハリスグリ
- 32、トカチスグリ
- 33、チシマイワブキ
- 34、アポイヤマブキショウマ (バラ科)
- 35、エゾシモツケ
- 36、リシリオウギ (マメ科)
- 37、エゾオヤマノエンドウ
- 38、マシケゲンゲ
- 39、マルミノウルシ (トウダイグサ科)
- 40、クロビイタヤ (カエデ科)
- 41、ミヤマハンモドキ (カウヤシソウ科)
- 42、ジンヨウキスミレ (スミレ科)
- 43、エゾゴゼンタチバナ (ミズキ科)
- 44、ヌマゼリ (セリ科)
- 45、カラフトイチヤクソウ (イチヤク科)
- 46、ヤチツツジ (ツツジ科)
- 47、オノエリンドウ (リンドウ科)
- 48、ユウバリリンドウ
- 49、ホソバツルリンドウ
- 50、バシクルモン (キョウツクトウ科)
- 51、クシロハナシノブ (ハナシノブ科)
- 52、ムラサキ (ムラサキ科)
- 53、カイジンドウ (シソ科)
- 54、ムシャリンドウ
- 55、エゾナミキソウ
- 56、テイネニガクサ
- 57、キバナシオガマ (ゴマノハグサ科)
- 58、ホソバウルップソウ (ウルップ科)
- 59、ヤチコタヌキモ (タヌキモ科)
- 61、エゾヒョウタンボク (スイカズラ科)
- 62、チシマキンレイカ (オミナエシ科)
- 63、コモチミミコウモリ (キク科)

- 64、アポイアズマギク (キク科)
- 65、エゾウスユキソウ
- 66、ユキバヒゴタイ
- 67、フォーリーアザミ
- 68、ウスユキトウヒレン
- 69、シコタンタンポポ
- 70、クモマタンポポ
- 71、ナガバエビモ (ヒルムシロ科)
- 72、カワツルモ
- 73、ヤハズカワツルモ
- 74、イトトリゲモ (イバラモ科)
- 75、ヒメアマナ (ユリ科)
- 76、エゾノミクリゼキショウ (イブ科)
- 77、セキショウイ
- 78、ネムロホシクサ (ホシクサ科)
- 79、エゾコウボウ (イネ科)
- 80、ナンブソモソモ
- 81、タチイチゴツナギ
- 82、フォーリーガヤ
- 83、カラフトテンナンショウ (サトイモ科)
- 84、ヒンジモ (ウキキサ科)
- 85、ウキミクリ (ミクリ科)
- 86、チシマミクリ
- 87、オハグロスゲ (カヤツリグサ科)
- 88、タルマイスゲ
- 89、タカネシバスゲ
- 90、ジョウロウスゲ
- 91、トナカイスゲ
- 92、ノルゲスゲ
- 93、タカネヒメスゲ
- 94、ヒロハイッポンスゲ
- 95、イトヒキスゲ
- 96、ミヤチスゲ
- 97、サヤスゲ
- 98、シロミノハリイ
- 99、キンセイラン (ラン科)

- 100、サルメンエビネ
- 101、ヒメホテイラン
- 102、トケンラン
- 103、ホテイアツモリ
- 104、レブンアツモリソウ
- 105、アツモリソウ
- 106、トラキチラン
- 107、ヒロハツリシュスラン
- 108、オオミズトンボ
- 109、ヤチラン
- 110、サカネラン
- 111、カモメラン
- 112、シロウマチドリ
- 113、ヒロハトンボソウ

絶滅危惧種 I I 類 (VU)

絶滅の危険が増大している種

- 1、エゾヒメカズラ (イワヒバ科)
- 2、ヒメミズニラ (ミズニラ科)
- 3、フサスギ (トクサ科)
- 4、チシマヒメドクサ
- 5、ヒメハナワラビ (ハナヤスリ科)
- 6、デンジソウ (デンジソウ科)
- 7、ケショウヤナギ (ヤナギ科)
- 8、タライカヤナギ
- 9、ヤエガワカンバ (カバノキ科)
- 10、ヤチカンバ
- 11、トキホコリ (イラクサ科)
- 12、ノダイオウ (タデ科)
- 13、ヌマハコベ (スベリヒユ科)
- 14、カトウハコベ (ナデシコ科)
- 15、タチハコベ
- 16、クシロワチガイソウ
- 17、アポイマンテマ
- 18、オオハコベ
- 19、シコタンハコベ
- 20、シレットコトリカブト (キナンド科)

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 21、キタミフクジュソウ (キツネノコブシ科) | 57、ヒダカイワザクラ (サクラソウ科) |
| 22、フクジュソウ | 58、レブンコザクラ |
| 23、フタマタイチゲ | 59、サクラソウ |
| 24、クロバナハンショウズル | 60、ソラチコザクラ |
| 25、コキツネノボタン | 61、テシオコザクラ |
| 26、ハルカラマツ | 62、ハイハマボックス |
| 27、チャボカラマツ | 63、チョウジソウ (キョウチクトウ科) |
| 28、ネムロコウホネ (スイレン科) | 64、スズサイコ (ガガイモ科) |
| 29、オゼコウホネ | 65、エゾキヌタソウ (アカネ科) |
| 30、エゾベニヒツジグサ | 66、エゾムグラ |
| 31、ヤマシャクヤク (ボタン科) | 67、カラフトハナシノブ (ハナシノブ科) |
| 32、エゾオトギリ (オトギリソウ科) | 68、エゾハナシノブ |
| 33、ナガバノモウセンゴケ (モウセンゴケ科) | 69、ミヤマハナシノブ |
| 34、ハナタネツケバナ (アブラナ科) | 70、チシマミズハコベ (アワゴケ科) |
| 35、エゾノジャニンジン | 71、ヒメハッカ (シソ科) |
| 36、ヒダカミセバヤ (ベンケイソウ科) | 72、ヤマジソ |
| 37、アポイミセバヤ | 73、オオアブノメ (ゴマノハグサ科) |
| 38、コモチレンゲ | 74、ネムロシオガマ |
| 39、ハゴロモグサ (バラ科) | 75、ホザキシオガマ |
| 40、キンロバイ (キンロバイ科) | 76、エゾミヤマクワガタ |
| 41、ユウバリキンロバイ | 77、エゾヒメクワガタ |
| 42、ウラジロキンロバイ | 78、ウルップソウ (ウルップソウ科) |
| 43、ホザキシモツケ | 79、タヌキモ (タムキモ科) |
| 44、カラフトモメンズル (マメ科) | 80、ヒメタムキモ |
| 45、カラフトゲンゲ (ゲンゲ科) | 81、ムラサキミミカキグサ |
| 46、ヒダカミヤマノエンドウ | 82、チシマヒョウタンボク (スズメ草科) |
| 47、ノウルシ (トウダイグサ科) | 83、ネムロブシダマ |
| 48、チシマウスバスマイレ (スマイレ科) | 84、ベニバナヒョウタンボク |
| 49、オオバタチツボスマイレ | 85、シラトリシャジン (キキョウ科) |
| 50、アポイタチツボスマイレ | 86、キキョウ |
| 51、ヤマタニタデ (アカバナ科) | 87、ホロマンノコギリソウ (キク科) |
| 52、ホソバトウキ (セリ科) | 88、オニオトコヨモギ |
| 53、チシマツガザクラ (ツツジ科) | 89、イワヨモギ |
| 54、エゾムラサキツツジ | 90、マシュウヨモギ |
| 55、サカイツツジ | 91、シコタンヨモギ |
| 56、ヒメツルコケモモ | 92、ヤブヨモギ |

- 93、アポイアザミ
- 94、エゾタカネニガナ
- 95、チシマコハマギク
- 96、ピオレギク
- 97、エゾコウゾリナ
- 98、ヒメヒゴタイ
- 99、ヒダカトウヒレン
- 100、エゾヨモギギク
- 101、マルバオモダカ (オモダカ科)
- 102、シバナ (ホロムイソウ科)
- 103、ホソバノシバナ
- 104、ホソバヒルムシロ (ヒルムシロ科)
- 105、リュウノヒゲモ
- 106、イトモ
- 107、イトクズモ
- 108、オオアマモ (アマモ科)
- 109、タチアマモ
- 110、エゾヒメアマナ (ユリ科)
- 111、オゼソウ
- 112、コジマエンレイソウ
- 113、カワユエンレイソウ
- 114、リシリソウ
- 115、ミズアオイ (ミズアオイ科)
- 116、カキツバタ (アヤメ科)
- 117、クロコウガイゼキシュウ (イガ科)
- 118、クシロホシクサ (ホシクサ科)
- 119、カラフトホシクサ
- 120、リシリカニツリ (イネ科)
- 121、ホソバウキミクリ (ミクリ科)
- 122、タマミクリ
- 123、ヒメミクリ
- 124、アポイタヌキラン (加ツリ科)
- 125、カヤツリスゲ
- 126、ヒメアゼスゲ
- 127、ネムロスゲ
- 128、イトナルコスゲ
- 129、ムセンズゲ
- 130、アカンスゲ
- 131、ホソバオゼヌマスゲ
- 132、エゾサワスゲ
- 133、ホロムイクグ
- 134、ウスイロスゲ
- 135、タカネハリスゲ
- 136、アカスゲ
- 137、ウシオスゲ
- 138、カラフトカサスゲ
- 139、コヌマスゲ
- 140、シュミットスゲ
- 141、シコタンスゲ
- 142、オノエスゲ
- 143、エゾハリスゲ
- 144、イヌオスゲ
- 145、エゾワタスゲ
- 146、ヒゲハリスゲ
- 147、タカネクロスゲ
- 148、コアニチドリ (ラン科)
- 149、エビネ
- 150、ナツエビネ
- 151、オクシリエビネ
- 152、ユウシュンラン
- 153、コアツモリソウ
- 154、クマガイソウ
- 155、ミズトンボ
- 156、オゼノサワトンボ
- 157、タカネトンボ
- 158、トキソウ

情報提供のお願い

今後とも5年ないし10年ごとに見直しを行なうこととされています。掲載された植物に、新産地と思われた自生地が見つかったり、個体数の減少など情報提供の呼びかけあり。

2001年(平13年)2月12日記

目玉でイワナを釣る?…クワンナイ川の沢のぼり

札幌市北区 三崎 篤

天人峽温泉からクワンナイ川を源頭までさかのぼり、五色岳からの縦走路に出て、「トムラウシ (2141m)」に向かうコースの途中「滝の瀬十三丁」といわれるクワンナイの滑床なめとこがある。

どこの沢も同様であるが、特にクワンナイ川増水時の滑床は危険である。事前に天候と水量の点検、そして地下足袋、草鞋わらじ数足、ヘルメット・カラビナ・ロープなど「沢づめ」用の装備が絶対要件となる。



コルリの前奏にせきたてられ入渓、時には腰まで浸かる流れを渡るなど約6時間渡渉を繰り返し、標高 970m二股 (化雲ノ沢) の辺りでテントを張る。

この先に「魚止めの滝」と呼ばれる10mの滝があり、この辺りではオショロコマ (カラフトイワナ) が入れ食いとか。ディナーの彩りにと釣り係りを仰せ遣って道具を拝借。

針、糸、竿はあるが「餌」がない。「餌がないぞ! 忘れたんじゃない」

「餌は御飯つぶかソーセージで十分、一匹釣れたら目玉を餌に、後は釣った魚の目玉が餌と言うこと、さあ行った行った」

半信半疑。御飯つぶで試みる。釣れない、それではソーセージではどうか、釣れない、魚影が眼下をかすめるのだが、一向に食いついてくれない。20年以上も釣りをしてない、腕が鈍ったか。そろそろ夕方、坊主で戻るのは悔しい、テント地まで「魚屋さん」は無い。

高校生のころ、ガガンボで尺ヤマメを釣ったことを思い出し餌探しを始める。都合よく、気温の低下で羽を休めているトンボを捕まえその尻尾を餌に一投、途端に確かな引き「釣れたあ!」

赤い斑点をちりばめ、しなやかで獐猛な面構えのオシヨロコマであった。その後1時間ほどかかって若干おおぶりのオシヨロコマを5匹釣りあげ、ようやくディナーに間に合い面目をほどこす。

釣ったばかりの肴で飲む酒の旨いこと旨いこと。翌日の分量をかなりくい込んでしまった。それにつけても陸封型とはいえ嗅覚で生まれた川を探り当てるサケ族の一員、死臭プンプンの仲間の目玉に食いつくのだろうか。

「7・8年前来たときは、俺はそれで釣った、しかも入れ食いで」と道具の持ち主はおっしゃる。嘘ではないらしい。以前は入らなかったこんな山奥までは釣人が入っているということで急激に数を減らし、しかも、目玉でごまかされなくなったというのが結論。

翌日、早い朝食を済ませ地下足袋のこはぜ小鉤をとめ新しい草鞋に換え、いよいよこのコースそれこそ「目玉」にむけ渡渉開始。

魚止めの滝(10m)、さらにもう一つ大きな滝(15m)を巻きしばらく行くと展望が開け長い「仕上げ砥石」のようななめど滑床にでる。白っぽい平たい一枚岩の表面を冷たい、澄んだ水が絹糸のようにサラサラと流れる。それがこのコースの目玉、「滝の瀬十三丁」である。

恵庭、漁川上流「白扇の滝」上手の川床。北湯沢から大滝本町へむかう右手、長流川の「白絹の床」などを広く、平らに、長くイメージしてもらえばよい。

それが延々と続く。サラサラの流れであってもつるつるの滑床には要注意。滑ったらつかまるものがない、所々に待ち受けている蟻地獄のような水風呂にドボンと浸かるのだ。それもまた気持ちの良いものである。

一時間半ほどでこの滑は終わるが、ふりそそぐ真夏の太陽も、吹き出す汗も、疲れも、心地好い足元の涼しさと景観が癒してくれた。

幾つかの滝を巻き、だんだんと水量が少なくなりやがてげんとう源頭、そしてお花



AERA Mook

新環境学がわかる

朝日新聞社 2000. 5. 30 第2刷発行

定価 1200円

昨年末、九州有明海で養殖されているノリが不作となり、その原因の一つが諫早湾で進められている干拓事業に起因するとのニュースが新聞やテレビで報道されています。ノリ養殖漁民の干拓工事の中止や水門開放要求がだされている一方、干拓工事を推進すべきとの団体もあって、この問題を複雑にしています。いずれにせよ開発計画がまずありきの論理が問題を引き起こしたと言えます。

日本では、1960年代の高度経済成長政策の中で埋め立てや干拓によって、全国に広がっていた干潟の約半分近くが失われたたと言いますし、1997年4月14日、日本最大の泥質干潟を持つ、有明海諫早湾3550畝が293枚のギロチンで締め切られました。この時も、「ムツゴロウか人間の生活か」という開発の論理に押し切られたのでした。

朝日新聞社発行の「新環境学がわかる」の中の一文「生き物たちの天国・干潟を科学する」に諫早湾干潟についての記述があるので、抜き出してみましょう。

干潟は、潮の満ち引きとともに水をかぶったり、干上がったたりするなだらかな海岸のことをいう。干潟はその底質によって泥質干潟、砂質干潟、砂泥質干潟などに分類される。

干潟は、陸から流れ込んだ栄養分や酸素や光がたくさんある所なので、広い海の中でも、特に生物生産量が多く、また生息している生物の種類も多い。そのほとんどが、泥や砂の中にもぐりこんで生活しているベント（底生生物）である。これら干潟の生物の主役は貝類、エビ、カニなどの甲殻類、ゴカイなどの多毛類である干潟は熱帯雨林に優るとも劣らない「生き物たちの賑わい」

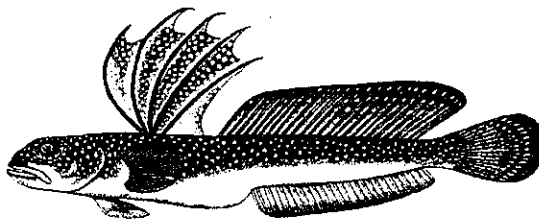
(生物多様性)が見られる環境である。

生物の種類が多いたけではない。干潟は水深が浅く、プランクトンなどの餌が多く、敵もあまりいない。そのため、重要な海洋生物の多くが、干潟で卵を産んだり幼児期をすごしている。ある程度、大きくなると深みに移動して、成長する。干潟や海藻などが生えている浅い海は、海の生物にとってはなくてはならない揺り籠の役割をはたしている。

陸地近くで漁をする、沿岸漁業をささえている場所が干潟や藻場である。ちなみに、諫早湾の生産力についての研究がある。1平方キの干潟は1年間で22.6トンの魚介類の生産があるという数字である。しかし、この数字も過小評価ではなかったのか。諫早湾が締め切られた後、干陸化した干潟の上で死んだ膨大なハイガイの死殻を見て、元漁民は「数十億円損した」と語り、干潟を研究している生態学者は干潟の生産力を過小評価していたのではないかと語っている。

本書は巻頭の「1992年のリオ・地球サミットでの合言葉『地球規模で考え、地球レベルで行動せよ』は、今も変わらない原則だ。…環境問題は、われわれの暮らしの足元と地球のあり方を問い始めている。」に始まり、終章での見出しでは、「20世紀が環境破壊の時代だったとすれば、21世紀はその修復の時にならざるをえない。…」との基調で一貫しています。

21世紀に生きる私たちが環境を考えていく上で、参考になる本書です。



ムツゴロオ *Boleophthalmus pectinirostris*

横目で見ると北イタリア美術館巡り (その一)

札幌市南区 佐藤 健一

昨年はミレニアム、それに因んでイタリア芸術を極める「名画受胎告知」を訪ねて、なる大変な意気込みの旅行企画がJTBから発売されました。

スケジュールは連日、美術鑑賞と一寸キツく、思案中でしたが、ダンテ様から電話があり、ダ・ピンチとミケランジェロが君を待っているよと言うので、極められるか、どうか分かりませんが、とにかく参加することにしました。

訪問するのは、北イタリアの都市ベルガモ、プレーシア、ヴェネツィア、パドヴァ、ラヴェンナ、フィレンツェ、ミラノ、そして、それぞれの街にある美術館、礼拝堂など、それにヴェネツィアの観光を半日、オプションにチェレの彫刻公園散策です。

さて、イタリアについて3日目くらいから、芸術鑑賞感覚不全の徴候が現れて参りました、どうやら鑑賞中毒らしいのです、症状は名画を見ても感激が薄い、どの絵も同じように見えるなど、所謂、生半可知識化けの皮はがれ症候群であります。

極める前にこの始末でございますので、次ぎから次ぎと、現れる偉大なイタリア芸術の前に、これ以上病状が悪化せぬよう、表題にあるような態度の悪い鑑賞方法となった訳であります。

従いまして、イタリア絵画や彫刻は、素晴らしいの一語のみで表現させて頂き、これ以上は申し上げられませんので、ご勘弁のほどお願い申し上げます。

幸い当会の「エゾマツ」は美術同好会の広報誌ではありませんので、イタリアで見た植物の話を少しばかりして、お許しをいただき、後は使い古しの鈍感を補修し、見た、感じた、聞いた、話した、食った、垂れた、歩いた、疲れた、など旅のゴタクを並べて、お茶を濁しますので、重ねてご勘弁のほど。

さて、我々が乗りましたルネサンスのふるさと行き飛行機、チャーター専門のラウダ航空と申しまして、社長がF1レーサーと財テクを両立させ、この仕事を始めたオーストリア人元F1レーサーのラウダ氏であります。

F1レースの好きの方なら、ア-あのラウダかと思ひ出すかも知れませんが、私などは、シュウマッハと中嶋悟さんがF1レーサーだ、くらいの知識しかありません。

イタリアは、自動車競走で航空会社を買える国なのですわ。

それはさておき肝心の飛行機ですが、社長の好みなのか、客席がF1のコックピットなみに狭いのです。

その代わりイタリアの太陽に育まれた美女軍団、フライト・アテンダントが愛嬌を振りまき、機内食の味をも、それぞれカバーする仕組みになっておりました。

新千歳を出発して12時間30分エコノミークラス症候群の発作にも襲われず、何とか2000年9月23日深夜12時すぎ、小雨のそば降るミラノ空港に到着しました。

ようやく座席という型枠から解放された皆さん、卵から孵ったばかりのヒヨコみたいにフラつきながらタラップを降りたものでした。

我々の一行以外、人影が見えないガラんとした到着ロビーで、体中の皺を伸ばす大の字体操、次ぎにイタリアの空気を腹式呼吸。

すると、かすかに香辛料のような匂いが聞こえてくるのです。

匂いが聞こえるなど、鼻が耳に俺の領域だぞと文句をつけそうですが、‘はながきく’ こともありますので、オアイコ、ただ匂いのくる方向に、聞き耳をたてた感じがしたから、変な表現をしたに過ぎません。

キョロキョロと辺りを見回しても向こうで入国管理官が、早くお出でと、こちらを見ているだけで、辺りに匂いの発生源らしきものは見当たらない。

これがイタリアの匂いかな、などと勝手に納得してバスに乗り込み、ここから50 Kmほど東にあるベルガモのホテルへバスは暗闇のなかを一直線で向かいました。

ボンジョルノ（お早うございます）寝たと思ったのも東の間、すぐ起床です。

7時の朝食、このホテルでは通常このような早い時刻に朝食は出さない、フロント氏が断るのを、添乗員がネバッテOK、させたそう。

相手が観光魔日本人なので、仕方なく抵抗を諦めたい。

荷物纏めて出発8時15分、なんでも鑑賞美術探偵団一行に、ミラノ在住の日本人美術観光ガイドが加わり、計19名、芸術を極める旅の始まりであります。

バスの出発まで一寸間があったので、ホテルの周りを植物観察、ツツジとなにやら本州で見かけるような樹木があり、図鑑を持参しなかったのが悔やまれます。

この地北緯46度、稚内の辺りに相当します、アルプス山脈のすぐ近くですが、地中海気候の影響を受けているようで、北国の感じがあまりしません。

中世都市ベルガモの旧市街は丘の上にあります、城門の広さに合わせて作られたバスらしくギリギリで通り抜けると、探偵団の皆さん思わず拍手、大変な運転技術です。

バスを降りると、最早そこは数百年前にタイムスリップ、石畳の細い小路から、黒いマントを着た鉤鼻のおじいさんでも現れたら、まさにピットンコ中世期、お前は東洋の魔男じゃな異端審問にかけるぞ、など下らない想像していたら、観光客が現実に引き戻してくれました。

ここで又、イタリア人美術解説ガイドの登場であります。

先程申上げたように、日本人ガイドがいるに何故またイタリア人ガイドかと、お思いかもかもしれません。

観光産業国イタリアでは雇用と外貨確保のため、有名な美術館や美術品のある礼拝堂の解説には、免許が必要な所が多いらしい。

外国人には中々のこの免許がおりないようです、このイタリア人ガイドさんは、日本語はダメで、只ニコニコして我々について回るだけですが、この方が居ないと日本人ガイドは、御用が果たせない訳であります。

何せどちらを向いても、お宝の山だらけという土地柄、各美術館に専属みたいなイタリア人ガイドと日本人ガイドとがペアで日本人向けに営業しております。

彼らは解説のほか、入館の予約をしてくれたり、通常1時間以上並ばねば入れない美術館に、待ち時間なしで、すんなり入館させてくれたり、この方達のおかげで、先々大変お世話になりました。

きらびやかなコッレオーニ洗礼堂、ドウモ(礼拝堂)、カッラーラ美術館のベルガモに別れを告げ、次ぎは芸術都市プレーシャへ向います。

バスの座席につくと、疲れと寝不足のせい、外を眺めているうちに、薄目をあけて居眠りを始めたらしい。

バスの車窓から目に飛び込み過ぎ去る見馴れた風景、とうきび畑が見える、ここは喜茂別かな、遠くに工場らしき建物が見える道央高速道路から眺める砂川辺り遠景かな、走馬灯のように風景が次々に変わっていく、

遠くに小さな教会の鐘楼、見馴れぬ風景にやっと吾に返った次第、時差ボケと寝ぼけのミックスで面白い体験をさせていただきました。

本当に北海道の風景によく似ておりました。

住宅の屋根が薄茶色の丸い瓦に統一され、それが遠くにイタリアポプラが見える農村の風景と調和し、絵のようにとっても美しい。

間もなくバスはドライブインに着きます、次ぎの予定が詰まっていますので15分間停車、時間厳守です、トイレご利用の方は50リラ(約4円くらい)ご用意くださいと、ガイドさんのアナウンス。

バスが停車すると探偵団一行、寸秒を惜しんでドライブインに突撃、少々オーバーですが、この表現が一番正確と思われます。

このドライブイン、日本の小型スーパーに似ていて品数も豊富、雑貨、特にヨソの国の何に使うのか判らない物は見ていると楽しい、みやげ物ほか、果物、ワイン、

生ハム、ソーセージ、チーズ、など、この地域で生産されたような酪農製品が多い。

2Kgくらいの生ハムの塊が800円ほど、今夜のワインのオツマミ、にと白い薔薇だらけのミニサラミソーセージ（直径5センチほどの棒天が7個ほど繋がったヤツ）300円くらいかな、そいつを買い込んでバスに引揚げました。

勿論、50リラは払いました、ご婦人方はお気の毒、貴重な時間を並らぶのですから、ガイドさんが次ぎに訪問する美術館の予備知識を語っている間、先程買ったサラミソーセージが気になってしょうがない、袋から引っ張り出して白い薔薇を払い、千切って食べようとした途端ふわりと匂うこの香り、アッ ミラノ空港のかすかに聞こえたやつ、そうです、忘れていたあの匂いです。

こいつの仲間が空港の何処かに潜んで居たと推測されるが、まずは有難く頂戴すると、中々の味、透明な肉の赤と白い脂肪の粒の配合バランスがよく、見た目にも食欲を誘う、柔らかくそれにスパイスがよく効いている。

日本で販売されているそれとは段違い平行棒、自分だけが美味しいと決め込んでいるのでは？と思ひ隣席のイタリア3回目のMさんに、試食をお願いしたところ、これはイケルと指で〇サイン、ワインに合いそうですね、と言うと、持っているよ。

予期せぬことに、さすがはイタリア3回目、カバンの中から飲みさしの赤ワインを取り出しました。

イタリアでは、旅の道連れそれワイン、ガイドさんが講義中なので、目で乾杯、調和の靈感は大当たり、ひそひそと、イタリア珍味物語を聞かせてもらいました。

残念ながら、このサラミソーセージ、以後立ち寄ったドライブインや商店で、探したのですが、再会出来ませんでした。

このMさん絵もたしなむそうで、かつてポッティチェリの「ヴィーナスの誕生」のヴィーナスに魅せられ、それを模写したことがあるそうです。

ところがヴィーナスの顔どう描いても東洋人くさい、いくら描き直しても、同じ顔が出てくる、いい加減に嫌気がして、途中で止めたと言ひ、未だに面白くないと言う口ぶりでした。

きつと、ポッティチェリが著作権侵害の嫌がらせをしたのだらう、と冗談を言うとならう嫌がらせをされるくらい上手になりたいよ、と答えが返ってきた。

そろそろバスは学芸都市プレーシャの街に入りました、キリスト教美術館は間もなくです、襟を正して鑑賞に行つて参ります。

では又

ニュージーランド自然観察の旅

札幌市東区 伊藤秀平

20世紀も終わりに近い12月、関西の旅行会社によるトレッキングツアーで、日本の7割ほどの国土に、北欧以上のスケールのフィヨルド、氷河、大草原、活火山、そして間欠泉、「地球の箱庭」と言われるニュージーランドの自然観察へ行く機会を得た。

北海道からは、私とツアーの講師で自然講師の三木昇先生の2人が参加。旅行会社の都合で千歳よりクライストチャーチへ直行し、他のツアー参加者とで合流する。

12月6日

大荒れになると言う予報でしたが、穏やかな天候に恵まれ 13:45 大韓航空にて出発。

ソウルで乗り継ぎ、ナンデイ (Fije) 経由ニュージーランドの首都オークランドへ。

12月7日

オークランドより国内線でクライストチャーチへ向かう。

クライストチャーチには午後 6:20頃に着きそのままホテルに向かう。当地は今は初夏で、夜10時頃まで明るい。

12月8日

午前中ハグレー公園 (面積182ha) を散策

午後1時に関西からの本隊と合流。本隊と言っても7名で総勢9名の気軽な旅となる。

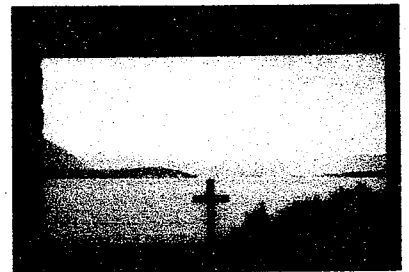
ここから336kmあるマウントクック村まで、カンタベリー平原を通過して、何も無い広々とした牧草地を、ただひたすら100km/hで走り抜けた。

見える物は羊の群れ。地面が白く見える?くらい群れている所も有った、何しろこの国は人口380万人に対し4500万頭もの羊がいる国である。

テカポ湖に着くあたりでようやく山頂が白い氷河に覆われたサザンアルプスの勇姿が見えてきた。テカポ湖のほもりには無人で石造りの小さな教会「善き羊飼いの教会」があり正面の木のドアを開けると、祭壇の十字架とその向かいに広がるサザンアルプスの白く輝く峰々、青く澄んだ美しいテカポ湖が1枚の絵となって見えた。

その教会の周りには色とりどりのルピナスの花が咲乱れている。

6時50分頃ニュージーランドを代表するリゾートホテルとして有名なハミテージホテルに到着した。

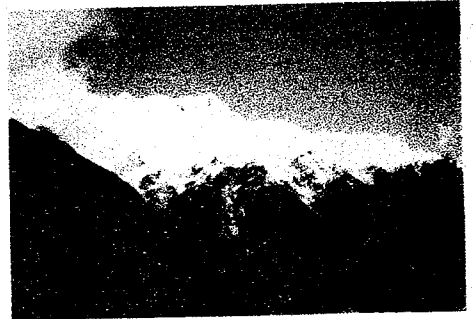
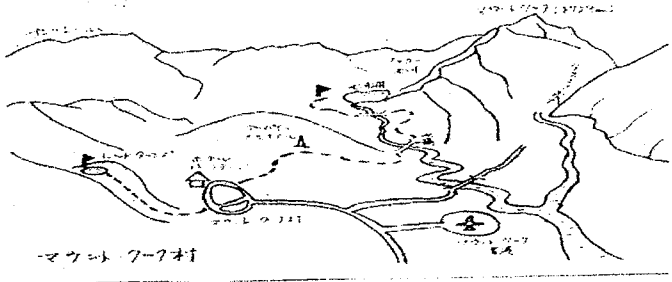


12月9日

フッカーバレーのハイキングコースで自然観察。 天気は快晴。

ホテルで用意されたランチボックス [ポイルチキン、蒸したジャガイモ、りんご (1)、小さなパン (2)、水 1ℓ (ペットボトル)] を持って、9 時出発。

ここには、色々なコースがありザイル、アイゼン等を装備する上級から、子供連れでも



散策できるファミリー向けのコースなど誰でも楽しめる素晴らしい場所である。

私達は氷河湖までの一般的なトレイルでした。ハイカーは少なくて夫婦とか 2~3 人のパーティに時々会うぐらいで、素晴らしい自然の眺めを、静かで本当にのんびりと楽しむ事ができた。

参加者の趣味は、写真、植物そして鳥と多様で、道中色々と観察に時間を取られるためペースが遅く通常の倍以上の時間がかかる。そのような事情でホテルに帰ったのは、夕方の 6 時頃。

花の見頃は 2 月頃で、今は早春、余り多くの花を見る事ができないが、一番の目的であるマウントクック・リリーは、最盛期でいたるところでお目にかかる事ができた。

そして鳥たちも繁殖期で、ニュージーランド独自の鳥、チャフィンチ、ブラックバード、イエローハンマーなどの綺麗な囀りがこの自然の景色を一層素晴らしいものにしてくれた。



トレイルは第一吊橋まで幅 1 丈程の整備された歩きやすい道になっている。

フッカー氷河から流れ出る白く濁ったフッカリバーに沿って、青空に高くそびえるマウントクックを正面に眺めながら快適なトレッキングが続く。

第二吊橋の近くになると川は深い溪谷状になりゴゴーと音を立てて流れ、その音と流れの速さに驚かされる。道は岩にへばり付くようにつけられていた。

吊橋を渡って岩を回り込んで行くと状況が嘘のように変わって湿原に出る。それからがマウントクックリリーが両側に多く見られる道が続き、やがてフッカバレーいっぱい大きく広がる湖にぶつかる。これがフッカー氷河の末端に出来た自然湖である。モレーンで出来た島や氷河の氷が浮かんでいた。

ここから先は細々とした道になり水量の多い流れを渡ったり、危険箇所も有って一般向きでないと言う事で、自然湖の周辺の景観をたっぷり楽しみ、来た道を



マウントクック村に向けて帰途につく。

12月10日

今日はホテルをはさんで、昨日の反対側に位置するセバストポール山の中腹にある、レッドターンズまでの往復3時間程の登山。

昨日と同じ内容の変わりばえのしないランチボックスを持って9時30分に出発。

「ターンズ」とは英語で、氷河活動によって作られた湖を意味しマウントクック周辺では標高1000に付近でよく見つける事が出来る。

2時間ほどの急な登りが続くが、チャフィンチ、ブラックバードの囀りを聞きながら、相変わらずのんびり登山を楽しむ。

中腹には小さな池が点々とあり、青い空に浮かぶ白い雲を写した池は、沼の平を小型化した感じで目を楽しませてくれた。

眼下にクック村の全景、真正面には昨日登ったフッカ谷やマウントクックが一望出来、素晴らしい展望に満足する。

ここの池には Red Pond Weed(赤銅ヒルムシロ)があり、その色からこのトレイルの名前が付いたのでは？と思われる。



12月11日

今日はマウントクック村の最終日。

ハミテージホテル裏手の森林、ガバナーズブッシュトラック。

樹齢150~200年位と思われるブナの林で、雨が多いので幹には苔や地衣類が多くつき、地面にはシダ類もたくさん見られる。

日本と同じ植物はほとんどなくニュージーランドのオリジナルの様なネーム板がついている、ここでは小鳥の声と観察のみ楽しんだ。

ブナは小さな葉の木で日本のブナとは全く違う木だった。

山を降りると池のほとりに、雌が首から上が真っ白のパラダイスシェルダックのつがいと七羽の雛を連れて休んでいた。



1時にクライストチャーチに向けて出発する。

途中道路一杯になって移動する牛に取り囲まれたり、集中豪雨にあう。牧場ばかりで木が無いために降った雨が一気に低地に集まるため道路が冠水して通行止めになるなど、ちょっとしたハプニングがあったが、クライストチャーチには6時頃無事に着いた。

12月12日

午前中、ハグレーパークを散策、2回目だが東京ドームが38も入る大きさの公園で見所はいっぱいある。

公園にはいろいろな植物があるが、中でも樹木は各国の木が植樹されて、どれもみんな巨木である。

松ぼっくりも15号以上のもの、大人が13人手をつないで囲むほどの木、等々その大きさには驚かされる。

ハナミズキ、セコイア、トチノキ、ユーカリ、シナノキ、コルクガシ、ラジアーターパイン等々。



午後1時に9人中7人の関西組は帰途につく。

その後は三木先生と2人の行動となる。インフォメーションセンターで聞いて、市街地から少し離れた所のサマーの岬へ行き、急な坂のフラワー・トレイルを登って草花や海鳥を観察する。



12月13日

9時10分、フレンチコネクションツアーのマイクロバスがホテルへ迎えにきた。運転手はデービー（女性）、客はキャロル（女性）、ティム（男性）それに我々2人、途中1人加わりアカロア・ハーバーへ

途中、歴史的建造物、アートセンターになっている昔の鉄道駅（リトルリバー駅）、アカロア湾を見下ろす高台でのピクチャータイム、チーズ工場の見学をする。運転手のデービーが説明するがヒアリングが出来ないので、1/3～1/4位しか理解できず・・・??



アカロアハーバーでのクルーズは海鳥、ペンギン、イルカのウォッチング・・・

灰色で小型のイルカが湾の入り口で何度も出現した。世界最小のイルカだそうだ。これがクルーズの目的で、ゆっくりとイルカを観察し 3時30分帰途についた。

行きとは違う100Km/h位のスピードで走り、5時にクライストチャーチに着く。



19時に空港に向かい、20時40分発にて、オークランド、ソウルを経由して千歳空港へ飛び立つ。

全行程が天候に恵まれ、自然講師の三木先生の同伴を得て楽しく、快適な旅が出来た事を感謝します。

平成13年1月25日

キーワード



花粉症

雪の解け始めた森の中に立つシラカンバの枝先を見ると、雄花が立派についているのを目にすることができます。この雄花が花粉をふりまく4～6月になると不快なアレルギー症状を訴える人が増えてきます。道外ではスギによる深刻な花粉症が伝えられています。

風媒花の花粉（風によって大気中に飛散する花粉）を吸収したために起こるアレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、気管支ぜんそく等の病気を総称して「花粉症」とよばれていますが、年々発病する人が増え、今では都市人口の20%に達すると推定されています。

花粉症はアレルギーの一種です。人体には侵入した異物を排除する抗原抗体反応という仕組みがあります。この反応が過剰になった状態をアレルギーといいますが、花粉症の場合は、花粉に含まれるある種のタンパク質が抗原と考えられています。

ある花粉を吸入しているうちに、人によってはその花粉が抗原（アレルゲン）となって、これに対応する抗体が体内にできます。そして、次の機会に同じ花粉（抗原）を吸収すると抗原抗体反応が起こって症状があらわれます。

原因となる花粉にはスギ（2～4月）シラカンバ（4～6月）、イネ科のオオアワガエリ、カモガヤ（5～8月）、キク科のブタクサ、ヨモギ（8～9月）などがありますが、最近、発症時期が長くなる傾向があります。これは、山のふもとまで舗装道路や家屋が増えたため、花粉が地面に固定しにくくなったためです。

日本気象協会北海道本部は、1996年から、シラカンバの花粉飛散量を観測しています。これまでのデータを分析したところ、前年6～8月の全天日射量（1㎡当たりの太陽光の熱量）とシラカンバ花粉の飛散量がほぼ比例していることを突きとめています。

北海道ボランティア・レンジャー協議会（会員用）

平成13年度 自然観察会予定表

下見会はそれぞれ会員の研修の場です、出来る限り参加するよう心がけましょう。

アテンション 下見会の日程が1週間前と前日があります、ご注意ください。

平成13年2月5日

| 観察会の名前 | 本番の日時 | 下見の日時 | 集合の場所 | 主催協力その他 |
|---|----------------------------------|-----------------------------|--------------------|-----------------------------|
| 4月の森の観察会 | 4月12日(木) 10:00~12:00 | 4月5日(木) 10:00~ | 野幌森林公園 開拓記念館前 | (主) 森林公園事務所 (協) 道ボランティア協 |
| 森の恵みに感謝しゴミ拾い ありがとう観察会 | 5月13日(日) 10:00~14:30 | 5月12日(土) 10:00~ | 野幌森林公園 大沢口 | (共) 森林公園事務所 (共) 道ボランティア協 |
| 環境月間協力行事 野幌自然観察会 | 6月3日(日) 10:00~12:00 | 6月2日(土) 10:00~ | 野幌森林公園 森の自然教室前 | (共) 北海道 (共) 道ボランティア協 |
| 恵庭自然観察会 | 6月17日(日) 10:00~12:00 | 6月16日(土) 10:00~ | 恵庭公園駐車場 | (主) 道ボランティア協 |
| ニセコ神仙沼自然観察会 交流会を6/30夜ペンション ふきのとうで開催 | 7月1日(日) 11:00~14:00 | 6月30日(土) 13:00~ | ニセコ神仙沼 駐車場 | (主) 道ボランティア協 (協) ニセコ自然の会 |
| 夏の森の観察会 | 7月15日(日) 10:00~14:30 | 7月14日(土) 10:00~ | 野幌森林公園 大沢口 | (主) 森林公園事務所 (協) 道ボランティア協 |
| 真駒内自然観察会 | 7月29日(日) 10:00~12:00 | 7月28日(土) 10:00~ | 地下鉄真駒内駅前 | (主) 道ボランティア協 |
| 8月の森の観察会 | 8月9日(木) 10:00~12:00 | 8月2日(木) 10:00~ | 野幌森林公園 開拓記念館前 | (主) 森林公園事務所 (協) 道ボランティア協 |
| 利根別自然観察会 | 8月26日(日) 10:00~12:00 | 8月25日(土) 10:00~ | 岩見沢利根別公園 大正池駐車場 | (主) 道ボランティア協 |
| 野幌自然観察会の集い | 9月9日(日) 10:00~12:00 | 9月8日(土) 10:00~ | 野幌森林公園 森の自然教室前 | (主) 道ボランティア協 (協) 森林公園事務所 |
| 秋の森の観察会 | 10月14日(日) 10:00~14:30 | 10月13日(土) 10:00~ | 野幌森林公園 大沢口 | (主) 森林公園事務所 (協) 道ボランティア協 |
| 森の恵みに感謝しゴミ拾い ありがとう観察会 | 11月11日(日) 10:00~14:30 | 11月10日(土) 10:00~ | 野幌森林公園 大沢口 | (共) 森林公園事務所 (共) 道ボランティア協 |
| 12月の森の観察会 | 12月6日(木) 10:00~12:00 | 11月29日(木) 10:00~ | 野幌森林公園 開拓記念館前 | (主) 森林公園事務所 (協) 道ボランティア協 |
| 1月の森の観察会 | 平成14年 1月17日(木) 10:00~12:00 | 平成14年 1月10日(木) 10:00~ | 野幌森林公園 開拓記念館前 | (主) 森林公園事務所 (協) 道ボランティア協 |
| 冬の森の観察会 | 平成14年 2月24日(日) 10:00~14:30 | 平成14年 2月23日(土) 10:00~ | 野幌森林公園 大沢口 | (主) 森林公園事務所 (協) 道ボランティア協 |
| 野幌早春の森観察会 | 平成14年 3月24日(日) 10:00~12:00 | 平成14年 3月23日(土) 10:00~ | 野幌森林公園 開拓記念館前 | (主) 道ボランティア協 (協) 森林公園事務所 |

観察会の名称はゴシック体で表示しています (主)(協)(共)はそれぞれ 主催 協力 共催 の略です。

ペンションふきのとう は後志支部会員 池田都郎さんのペンションです 電話 0136-58-2623

問い合わせ 北海道ボランティア・レンジャー協議会事務局 電話、ファックス 011-592-4222 佐藤
野幌森林公園事務所 011-898-0455 内線 44 公園利用課

編集後記

- ◆全道的に気温の低い今年の冬も終わりを告げています。心の浮き立つ季節がすぐそこにきています。平成13年度の活動が始まります。会の活動はもとより、自分のフィールドを定めて、積極的に行動していきましょう。
- ◆平成13年度の活動計画のアウトラインが役員会で設定されました。4月の定期総会で会員の皆様の討議を経て決定していきます。会への意見や要望がありましたら、事務局か広報部へご連絡ください。
- ◆平成13年度も「会員の声」「私の一名山」を継続していきたいと考えていますので、会員の皆様に原稿の依頼をすることとおもいます。その節はよろしく願いいたします。

北海道ボランティア・レンジャー協議会
会報誌「エゾマツ」56号 2001.3.30 発行
発行責任者 川 端 功 治

